

# 室田窯跡 (明治～戦後頃の石見焼窯跡)

市道浜田西49号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2006年3月

島根県 浜田市教育委員会



室田窯跡全景



3 房内部



窯跡断面



旧瓦窯の大口と1房

## 序

浜田市では江戸時代終わり頃から「石見焼」と呼ばれる粗陶器と瓦が焼かれ、現在も伝統産業として受け継がれています。しかし、その起源や変化・流通範囲など不明な点が多くあります。浜田市教育委員会ではこれらの文化財の解明も重要と位置づけ、市道改良工事に伴い、室田窯跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査の結果、明治～戦後頃のすり鉢・植木鉢・片口鉢・つぼかめ・椀皿など多種多様な陶器を焼いた登窯を確認しました。さらにその窯の下に瓦窯が残っており、瓦窯を丸物窯へと改築したことがわかりました。石見焼が生活必需品として多く用いられた繁栄期の様子を知る上で重要な調査となりました。

本書はこの調査結果を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習など幅広く活用するための基礎資料としてまとめたものです。この調査報告が地域史研究への一助となり、文化財保護思想の普及へと結びつくことを願っております。

おわりに、あらゆる面から調査にご協力いただきました地元の方々に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

平成 18 年 3 月

浜田市教育委員会  
教育長 山 田 洋 夫

## 例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が市道改良工事に伴い実施した室田窯跡発掘調査の報告書である。

平成 16 年度に現地調査、平成 17 年度は遺物整理と報告書作成を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体 浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠（～平成 17 年 11 月 18 日）  
　　　　　　山田洋夫（平成 17 年 11 月 19 日～）

調査指導 島根県教育委員会 文化財課

調査員 原 裕司・榎原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

事務局 浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

平成 16 年度 文化振興課長 高松政美

文化財係長 神山真治

平成 17 年度 文化振興課長 山根 稔

文化財係長 原 裕司

主任主事 瀧山恵子・主事 堀 智美

2. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力 森脇 朗

調査参加 岩本秀雄、佐々木五郎、佐々木定実、竹藤和憲、田渕義明、中田洋子、  
中田貴子、原有里、半場利定、村上美佐子、吉賀久雄、吉田安男

3. 基準点は工事に伴い三和測量設計株式会社が設置したものを使用した。挿図の方位  
は磁北で示している。

4. 附属 CD には本文（PDF 形式）、窯跡計測表・遺物集計表（Excel 形式）、調査・  
遺物写真（JPEG 形式）、3 次元計測データ（AVI 形式・JPEG 形式）を収録して  
いる。

5. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。

6. 本書の執筆編集は榎原が行った。

## 本　文　目　次

第 1 章 経　過	1
第 2 章 遺跡の位置と概要	1
第 3 章 調査の方法と成果	6
第 1 節 調査の方法	6
第 2 節 遺構	6
第 3 節 遺物	11
第 4 章 総　括	21

## 第1章 経過

浜田市建設整備課より熱田町での市道浜田49号線道路改良工事の工事計画が提示され、市教育委員会に平成16年7月6日付で埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。対象地は海岸に近いJR西浜田駅の南側の丘陵斜面に位置し、現地測量の際に石見焼の登窯があることが確認された。分布調査と現地聞き取りの結果、周知の埋蔵文化財である室田窯跡（島根県遺跡地図 L 179）がこれにあたると判断された。遺跡地図ではかなり南東側に記されていた。

これらの分布調査結果を受け、事業者と協議を行い、発掘調査を実施することとなった。平成16年9月10日に発掘調査依頼を受け、調査を9月13日より10月にかけて実施した。なお、10月2日に現地説明会を開催した。遺跡の位置は島根県浜田市熱田町1425（室田窯跡）で、調査面積は140m<sup>2</sup>である。遺物整理と報告書作成は平成17年度に実施した。

## 第2章 遺跡の位置と概要

周辺には縄文時代以前の遺跡は確認されていない。道休畠遺跡では、丘陵上で弥生時代末墳～古墳時代初頭の焼失竪穴住居1棟が確認されている（東森2004）。古墳は横穴式石室が露出する塚原山古墳群、石室の奥壁らしき石が道路脇に残る後面古墳、上内田古墳がある。中世には要害山城があり、豎堀・堀切・土塁などがある（島根県教育委員会1997）。周布郷のうち内田村・内村を支配した内氏（周布氏の庶子）との関係がうかがえる。

江戸時代末頃から石見地域で生産された「石見焼」は浜田市西部では明治時代末頃にひろまる。戦時中の企業統制により多くの工場が休業し、戦後に一時復興した窯もある。しかし、プラスチック製品や水道の普及により昭和40年代後半にはほとんど生産は行われなくなる。浜田市西部は土質の関係で、すり鉢・瓦の生産が主体になっている。

「石見焼」には「丸物」と呼ばれる生活用品の粗陶器（すり鉢・甕など）と「瓦（石州瓦・赤瓦）」に分けられる。釉は出雲の宍道産の来待石と呼ばれる砂岩を基にした来待釉（赤褐色）と石見の温泉津産の長石

を基にした並釉（透明釉）が代表的である。

今回の調査地はJR西浜田駅から直線距離で約150m南東の標高約8.4～15mの丘陵斜面に位置する。窯跡は丘陵の南側に位置し、道路脇に大口が残り、下から4房は天井まで残っていた。5・6房は半壊の状態で、さらには既に造成されて残っていなかった。丘陵頂上の墓地内にレンガ組みが見え、煙突か付属房の跡と考えられる。

各文献による室田窯跡の記述は以下のとおりである。

浜田市商工水産課『浜田の窯業』昭和28年

- ・室田工場 経営者 室田久一 常雇数 2
- ・昭和10年 石見陶器工業組合成立、戦時中は島根陶磁器統制組合、戦後に石見陶器工業共同組合

平田正典『石見粗陶器史考』昭和54年

- ・浜田市熱田で明治30年代に、室田萬市（久一か）が丸物窯について、すり鉢・こね鉢・水がめなどをつくった。
  - ・昭和18年の統制令で陶器株式会社が再編され、浜田陶器株式会社になる。
  - 室田工場は休業（存置工場は7工場、約20の工場が休業）
  - ・昭和27・28年頃
  - 室田工場 常雇数 5
- ※昭和42年1月の名簿には記載なし

平田正典 島根県生産遺跡調査カード 昭和59年

室田窯 西浜田駅裏 丸物・すり鉢

聞き取りや文献によると窯跡の経営者は隣家の室田氏で、明治30年頃から戦前まで操業し、戦時中は休業し、終戦後にはしばらく再開したことである。粘土は周辺より採取し、経営者宅南側には2階建ての作業小屋があった。おおまかに1階はロクロ場、2階は乾燥場であった。物原は上が整地されて平坦になっており、そこで仕分けや梱包を行い、西浜田駅から搬出したとのことである。



平成 11 年発行・番号は表 1 に対応



第 1 図 遺跡周辺図 (S = 1/25,000)

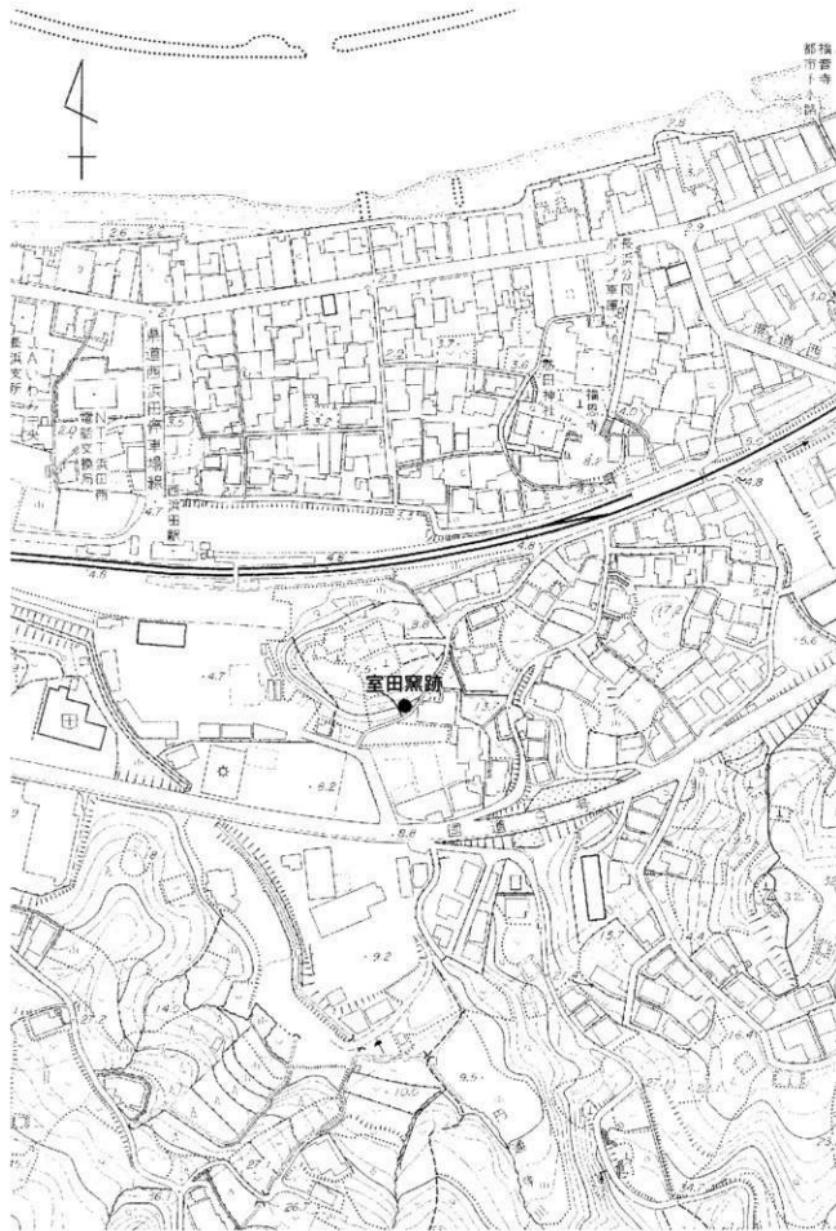
明治 34 年発行・番号は表 1 に対応

番号	遺跡名	種別	概要
1	室田窯跡	石見焼窯跡（瓦→丸物）	瓦・丸物・すり鉢・明治30年代～戦前：発掘調査実施
2	平野窯跡	石見焼窯跡（丸物）	すり鉢・昭和9～45年：発掘調査実施
3	小泉窯跡	石見焼窯跡（瓦）	瓦・大正年間（明治は今浦窯か）
4	森脇窯跡	石見焼窯跡（丸物）	丸物・すり鉢・明治38年創業～平成3年頃まで
5	森脇分家窯跡	石見焼窯跡（丸物・瓦）	丸物・すり鉢・瓦・大正11年創業・戦後移転
6	佐々木窯跡	石見焼窯跡（瓦→丸物）	瓦・すり鉢
7	永見窯跡	窯跡？	人形（初期長浜人形）・文化年間創業
8	渡辺窯跡	石見焼窯跡（瓦）	瓦・大正～昭和
9	今浦窯跡	石見焼窯跡（瓦）	瓦・明治年間創業
10	村田窯跡	石見焼窯跡（丸物）	丸物・すり鉢・昭和初期創業
11	岸本窯跡	石見焼窯跡（瓦）	瓦・明治年間創業
12	内田窯跡	石見焼窯跡（丸物）	すり鉢
13	道休烟遺跡	散布地	弥生土器・土師器・焼失竪穴住居：発掘調査実施
14	後面古墳	古墳	土器・刀剣・石室石材？
15	上内田古墳	古墳	
16	要害山城跡	城跡	山城
17	王子山古墓	古墓	宝篋印塔3基
18	塚原山古墳群	古墳	円墳、横穴式石室
19	古城跡	城跡	

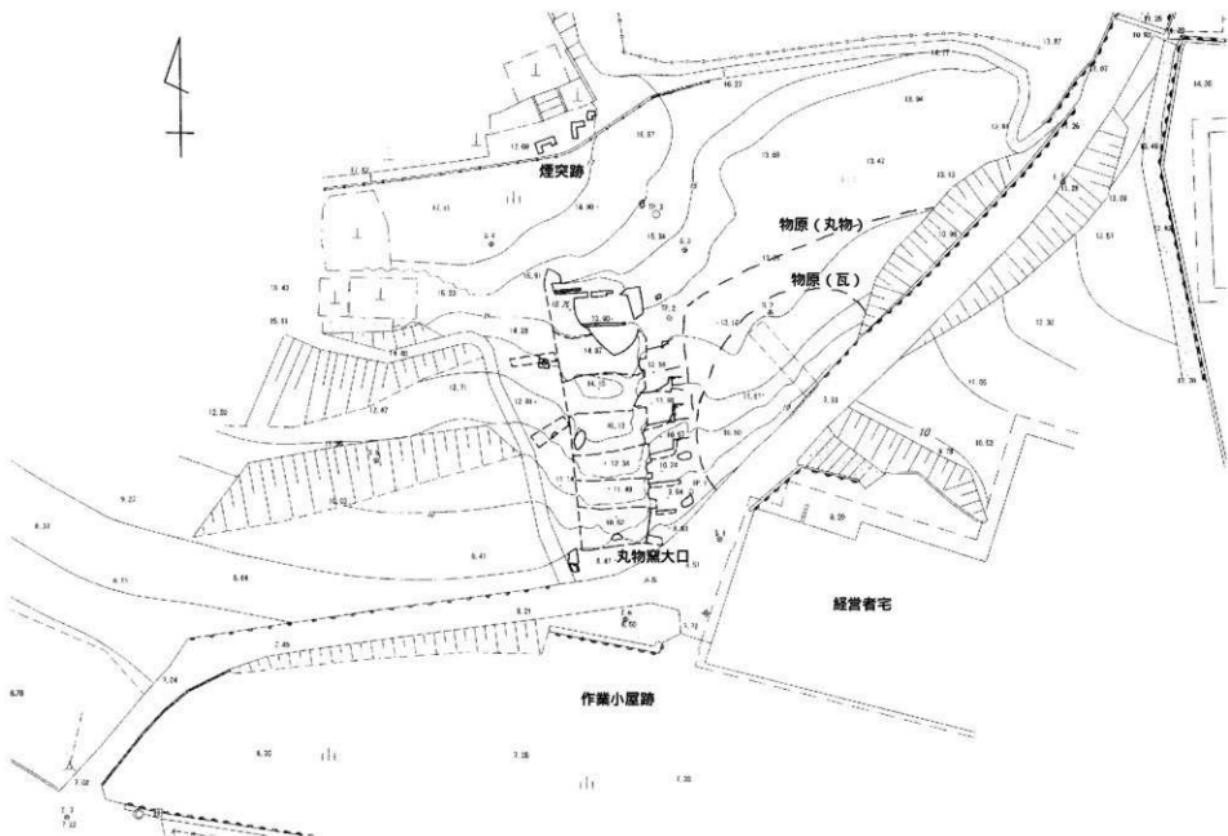
表1 周辺の遺跡概要



作業状況



第2図 室田窯跡位置図(1) ( $S = 1/2,500$ )



第3図 室田窯跡位置図(2) (S = 1/250)

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

石見焼は江戸時代以降、石見地域で陶器と瓦を焼いた伝統産業であり、地域において特に重要な遺跡になる。これまで江津市・浜田市・益田市で石見焼窯跡の発掘調査が行われてあり、各地で製品や窯の状況が明らかにされている。このため必要最低限の調査を実施することとした。人力で窯跡の清掃を行い、記録作成（平面図・立面図・房内平面図・房ごとの計測）を行った。その後、重機で窯の長軸に併せて地山面まで半裁し、窯の構築・修理状況の確認と縦断図を作成した。横断面は立会により確認を行った。

物原は窯の横にあり、まずトレンチ調査により上層に丸物、中～下層に瓦が堆積する基本土層を確認した。その後、表面採取で基本遺物を選び出して選別し、重機と人力を併用して断面図作成と遺物採取を行った。後半は工事と併行しての調査となり、膨大な遺物の総点数と器種ごとの内訳は十分に把握できなかった。

#### 第2節 遺構（表2・第4・5図）

窯は斜面に築かれた連房式登窯で、各部屋は火格子という穴で繋がっている。各房には入口と作業場がつき、房内には様々な焼台が積み上げられていた。

本来、窯は上方が既に造成などで壊されていた。しかし、最高所の墓地に煙突跡といわれるレンガ組みが見られた。窯跡は大口～4房は天井まで残り、5・6房は半壊、7房から上は造成されて残っていない。窯の残存長約14.5m・幅約3.5～4mを測り、全長は復元で約22mになる。

周辺地形をみると、窯が築かれた場所はもともと独立した丘陵で、丘陵上は墓地があり、松の大木が生えていた。このため地元では「一本松」と呼ばれていた。

この松は戦後に窯のほうに台風で倒れ、窯を壊したと聞いている。

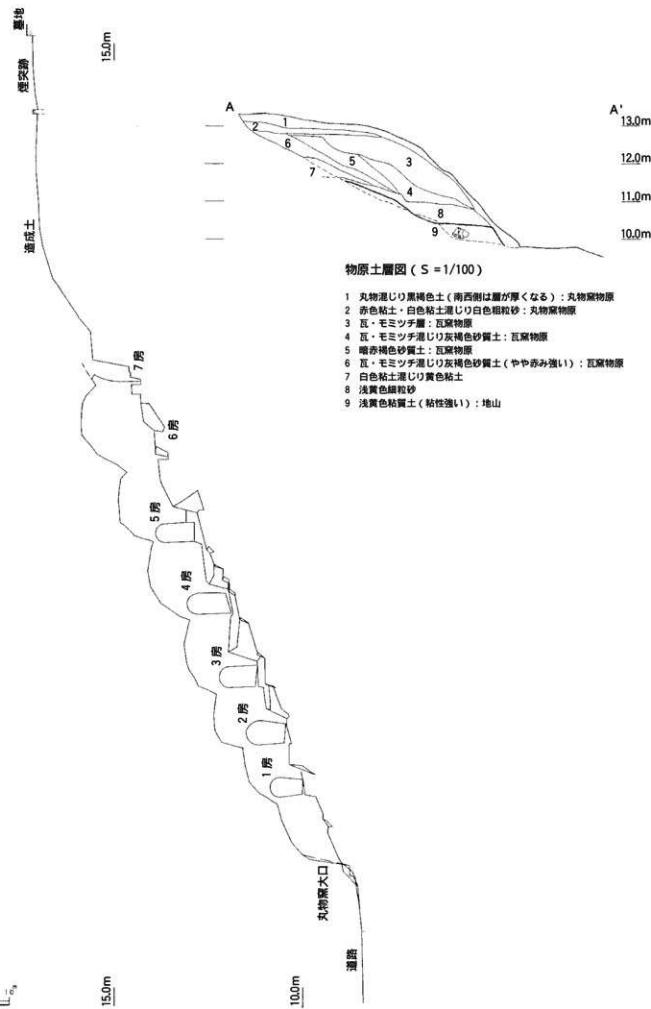
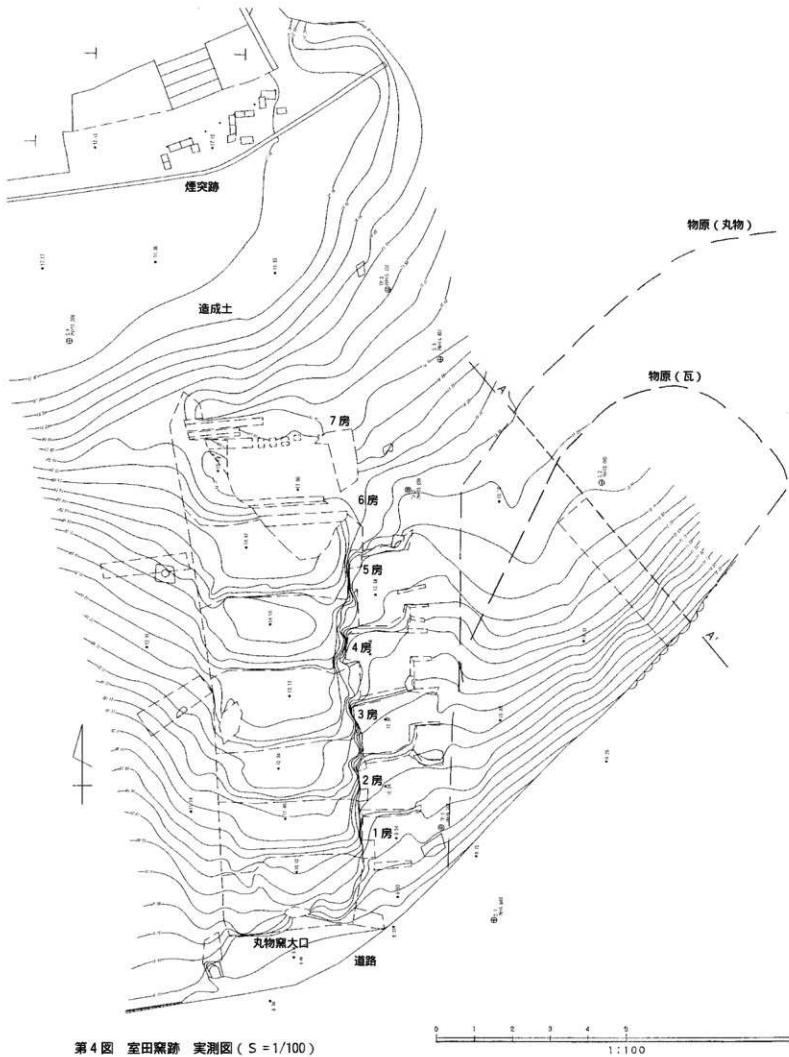
登窯は基本的にレンガを組上げて造られ、トンبارリ（大・小）・アゼと呼ばれる自作のレンガを用いている。各房の計測値は表2に示した。房の大きさは後方の6房が最も大きく、下に向かって房が小型化していく。床（ハマ）勾配は5～9°である。焚室は多量に

釉着しているが各房で幅・深さなど大きな差は見られない。各房の勾配は21～36°となり、特に2房が急である。ほぼ2.6～3.2寸勾配で築かれている。火格子穴は大半がトンバリを2段積んでいる。穴の大きさは縦13～26cm、幅10～14cmである。火格子穴の数は大口から9～12と増えていく

各部屋には下から向かって右側に幅0.52～0.61m、高さ1～1.16mの長楕円形の入口がつく。現状では入口横に窯焚き時に入口を塞ぐレンガやトンバリが積み上げられている。これらのレンガ類を取り除くと外から色見皿を出し入れする火見穴がある。穴に使うものが又ケの場合は円形、トンバリの場合は方形である。この穴は外から（第10図・100、101）のような栓を差込み、塞ぐことができる。入口横には薪置きや通路として使われる焼台や石で造った平坦面（作業場）があり、石やトンバリを用いて造った階段で繋がっている。階段の東側は丸物の物原になっている。窯の西側は窯に盛土を行い、盛土の上面に覆い屋根の柱基礎をコンクリートで作っている。盛土は窯の保温のためと考えられる。

房内部にはゴミや焼物が誰多に入っており、窯の廃棄後に物置や遊び場に使われ、人が出入りしていたようである。このため、操業時の位置を保つ焼台に留意しながら清掃を行った。1房には火立て、2房には又ケ、3房には火立てと又ケ、4～6房には又ケが残っていた。2房は焚室側（低い側）から又ケが低いもの・高いもの・低いものと3列交互に立てられていた。3房は焚室側（低い側）から火立て・低い又ケ・高い又ケ・低い又ケ・高い又ケと4列交互に立てられていた。火立ては倒した状態と考えられ、窯使用時には立てたのであろう。4～6房で見つかった高い又ケは、傾いたり1～3房ほど整然と並べられておらず、後に動かされている可能性もある。窯内から製品は見つかなかった。元位置を残す焼台は入口側に少なく、奥側に残る傾向がある。焼台類を取り出したあと床面は砂面（ハマ）である。

窯の構築方法は地山を焚室～床面にあたる部分を段状に加工してレンガ類で窯を組み、房内部に砂（ハマ）を入れている。なお、地山は被熱して赤色になるが、



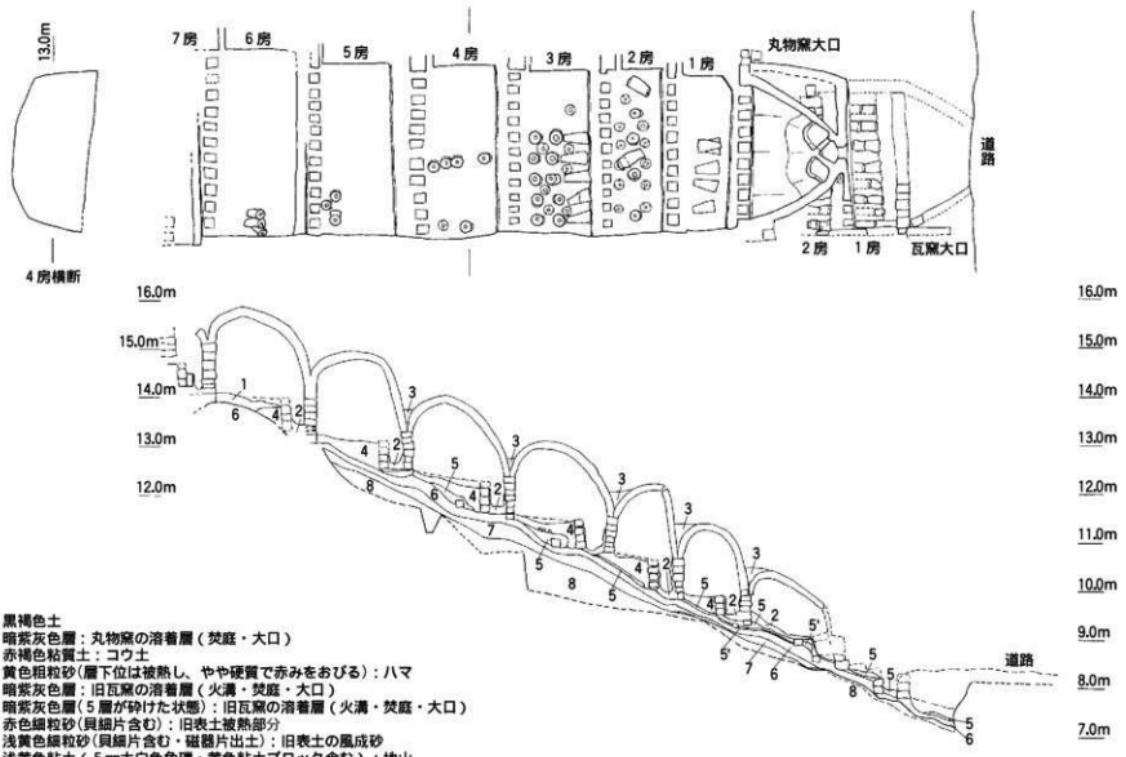
	ハマ(床)					火格子穴				焚庭(火溝)		勾配	小口(入口)			甲(天井部)			作業場			備 考
	木取り (幅)	奥行	高さ	勾配	火格子 穴	幅	幅	深さ	火格子穴	幅	高さ		幅	高さ	露抜き 穴	火の見穴	幅	奥行	下段と の比高			
大口 幅0.45 -2.87	長さ 1.68 ~ 1.71	1.19 1.11	16	9	23× 11					26										レンガをハの字状 におく		
1番	3.1	0.85	1.19	5	10	17× 11	0.2	0.37	9	26	0.52	1.14			□ 0.12× 0.3	1.94	1.33	0.66		房内に火立てが残 る		
2番	3.15	0.97	1.38	9	11	18× 11	0.19	0.51	10	36	0.60	1.00			□ 0.11× 0.33	1.60	1.54	0.60		房内にヌケが残る		
3番	3.19	1.41	1.34	5	12	18× 10	0.21	0.48	11	22	0.60	1.03			○ 0.8× 3.2	1.50	1.60	0.68		房内にヌケ・ハリ・ 火立てが残る		
4番	3.29	1.50	1.50	9	11	20× 10	0.23	0.53	12	26	0.59	1.16			□ 0.12× 0.35	1.45	1.83	0.64		房奥にヌケが残る		
5番	3.41	1.53	1.40	5	12	13× 12	0.21	0.32	11	21	0.54	1.13	○ 0.14 × 0.28			1.38	2.12	0.60		天井半分崩落		
6番	3.75	1.62	1.7 +	9	12	24× 12	0.25	0.38	12	25	0.61				□ 0.12× 0.54	1.20	2.20	0.70		天井半分崩落		
7番					2 +	26× 9	0.7 ~ 1.2	0.33	12							1.55	2.12	0.58				

## 丸物窯(新)

	ハマ(床)					直立段				火溝			火格子穴			焚庭			勾配 (°)	備 考
	木取り (幅)	奥行	高さ	勾配 (°)	火格子穴	横段 数	縦段 数	幅	高さ	長さ	幅	深さ	幅	レンガ 幅	幅	深さ	火格子穴			
大口 幅2.5 ~ 1.1	長さ1.3 +												0.16							西側のみ残る
1番	2.8	0.66		16	2+(5)	7	2	0.22	0.16	0.25	0.14	0.36	0.08 ~ 0.013	0.023 ~ 0.026	0.345	0.31	2+(5)	30		
2番	3.2	1.3		26	5+(3)	4+	2+	0.22	0.16	0.32					0.21	0.27	5+(3)		中央は丸物窯の大 口二改修	
3番		1.2		23	4+														断面図より計測	
4番		1.3		33															断面図より計測	
5番		1.4																	断面図より計測	
6番																				

## 瓦窯(古)

表 2 窯跡各部計測表



第5図 室田窯跡房内平面図、断面図 (S = 1/100)

もとは浅黄色細粒砂と浅黄色粘質土である。なお、地山の上に堆積していた浅黄色の砂は貝の細粒を含んでおり、海よりの風成砂であろう。おそらく、旧地形は陶土になるような粘質土の上に風成砂が堆積した砂山の状態であったと考えられる。

断面調査の結果、各房の床面下から古い瓦窯の火溝と窯道具が出土した。重機で半裁中に下に瓦窯が存在することが判明し、大口下を平面的に精査することによって規模を確認した。残っていた丸物窯の大口部分が瓦窯の2房目にあたり、そこから南側の現在の道路下に瓦窯の1房と大口が確認できた。大口先端部分は水道管等があり確認できなかった。1房は火溝と直立段が2段残っていた。

天井（甲）はトンバリ・アゼを使ってアーチ状につくり、隙間に粘土や焼台・すり鉢・瓦の破片を詰めている。天井の高さは0.85～1.62mと下から順に高くなる傾向がある。天井にスケを埋め込み周囲に粘土を詰めた露抜き穴は5房の中心に1箇所あるのみで他の天井が残る房には造られていない。

窯の覆屋根（カマヅヤ）の柱はコンクリートで基礎が造られていた。東側は作業場の角に造られている。西側は盛土上面でコンクリート基礎、盛土下位で礎石が確認された。おそらく、旧瓦窯の覆い屋根の柱は礎石建ちで、丸物窯はコンクリート基礎であろう。なお、道路脇の礎石は上にコンクリートで基礎が造られており、そのまま転用されたのである。窯の天井にはほとんど瓦が残っておらず、物原表面に瓦が見られることから、片付けて物原へ置いたと考えられる。

窯の清掃作業に平行して、物原の状況を確認するためトレンチ調査を実施した。窯跡下の道路を作る際に物原を削ったとのことである。表土（第4図・1～2層）には片口鉢・すり鉢・植木鉢などの破片が多く見られたが、分布範囲も広い。現地形は平坦に整地されており、道路側の崖に多くの遺物が残っていた。表土下（第4図・3～6層）からは瓦と窯道具（ハセ・モミツチ）の層が確認され、当初は瓦を焼いていたことが明らかになった。なお、瓦層の下には調査範囲外のため充分に確認できなかったが、二次堆積状の粘土層（第4図・7層）がみられ、瓦窯を作るときに使った

粘土の可能性もある。

### 第3節 遺物(第6～12図)

出土遺物の中で溶着物、付着物が見られる物や歪んだ物はこの窯の製品と判断した。物原は道路脇で家にも隣接しており、生活用品もかなり混じっていた。できるだけ窯焼成品とそれ以外を分けるようにしたが、不明確な遺物も多くある。

主な製品は丸物窯では、楕円・片口鉢・すり鉢・捏鉢・植木鉢・瓶類・鍋・行平類・乗燭類・つぼかめ類が見られる。なお、丸物窯の下層で見つかった瓦窯の製品は物原の中下層を中心に出土した溶着瓦と、瓦窯内から出土した瓦を基準に考えた。調査前に物原表面に瓦が多く見られたが、窯の覆屋根に葺かれた瓦を片付けたものと考えた。

#### 製品

##### 楕円類（第6図・1～15）

1・2は来待釉がかかる楕である。1は胎土が粗く、器壁も厚い。他の楕と比べて陶器質で古い印象を受ける。3・4は並釉がかかるが、13など現在よく見られる釉色と比べると緑味が強い。3は内面見込みに多量の砂が付着する。1・3・4は器高が低く、环に近い器形になる。5・8は鉄釉がかかる。5は楕で8は皿である。いずれも器壁が薄く釉は厚くかかる。6は腰が低い深楕で口縁上端に面を持つ。釉は薄かったためか灰色で発色が悪い。7・9はコバルト釉がかかる楕と蓋である。釉はいずれも高台接地面以外全面にかかり、器壁が薄手である。10は並釉のかかる多角形の楕皿類と考えられるが、口縁端部破片のため全形は不明である。11は並釉のかかる楕で内面見込みに「寿」が黒色で描かれる。内面見込みにはハリ跡が8点残る。13は口縁を外から押さえて窓ませ輪花状にする楕で、並釉がかかる。14は並釉がかかり、器形からみると鉢になるかもしれない。内面見込みにハリ跡が5点残る。15は来待釉がかかる鉢皿で、内面に御目がつく。口縁端部は面をもち、片口部がつくられる。

##### 片口鉢（第6図・16・17）

16・17は作りが同じで法量が異なる。並釉がかか

り、内面見込みにはハリ跡が6点残る。片口部は玉縁口縁下をU字状に切り取って片口を接合している。

#### すり鉢（第6図・18～24）

いずれも来待釉がかかる。法量は大小様々な物が作られている。内面のすり目の調整法から大きく3種類に分けられる。(18・19)→(20・21・23)→(24)と変遷すると考えられる。

18・19は片口鉢の内面にすり目をつけた器形だが片口鉢ほど体部は丸みをもたない。しかし、すり鉢の中では体部に丸みがあるのが特徴的である。内面は卸目を施したあとに上端をナデ消すが、ナデが粗く完全にすり目上端を消しきっていない。

20は最も小型のもの、21・23は中型である。22は最も大型で、内面は釉をかけず、すり目の間隔も広い。内面は卸目を施したあとに強く上端をナデ消すが、すり目上端を消しきっていないものもある。強くナデを施すため、すり目の上端には段がつく。

24は高台接地面に「石見焼 余製」の印がある。内面は釉をかけた後に卸目を施して上端をナデ消して段をつけ、さらに沈線を入れてすり目の上端と口縁端部内面を画している。

#### 捏鉢（第6図・25・26）

いずれも大型品で並釉がかかり、体部上位が丸みをもって内湾するのが特徴である。25は口縁上端が内湾し、玉縁口縁がつく。内面見込みにはハリ痕が復元で8点残るが、大きく歪んでいる。底面には砂が付き、円形の焼台痕がつく。26は口縁端部が横に突き出る。底部は低く幅広の高台を削りだす。

#### 植木鉢（第7図・27～36）

27～29は入れ子状態でみつかった。いずれも並釉がかかり、作りが同じで法量が異なる。口縁端部は上に屈曲し、底部の穴は外側より切り取っている。高台は半円の切込みを3箇所入れている。30・33は黒色釉がかかり、口縁端部は外方向へ屈折させる。31は暗褐色と淡褐色の2種類の土を練り込み、マーブル模様のように仕上げる。透明釉が外面のみかかる。高台接地面に「石見焼 余製」の印がある。32は法量が

何種類かみられる。表面が暗赤褐色、断面が暗灰色の無釉の植木鉢で底部に「室田」の丸印が押される。装飾を施した半円形の脚を3箇所貼り付ける。鉢本体の脚接合部にはハケ状に線を入れている。体部外面下は雷文を1周させる。底部には穴があけられている。34は口縁部で淡緑褐色の釉がかかり、口縁上端は平坦である。外面に突窓を削り出し、刻みを入れる。35は暗緑灰色の釉がかかり、外面下に3本の沈線を施す。36は底部近くの破片で淡緑灰色の失透性の釉がかかる。外面に突窓を削り出し、刻みを入れる。

#### 瓶類（第7図・37～41）

いずれも並釉が基本的に外面と内側の頸部分までかかる。37～39は器形が細身で錐子のような形、40・41は胴が丸みをもつ徳利形である。38は外面にコバルト、39は銅でそれぞれ「寿ふく」と描かれる。41は高台接地面の釉を削り取っている。

#### 鍋・行平・急須類（第7図・42～47）

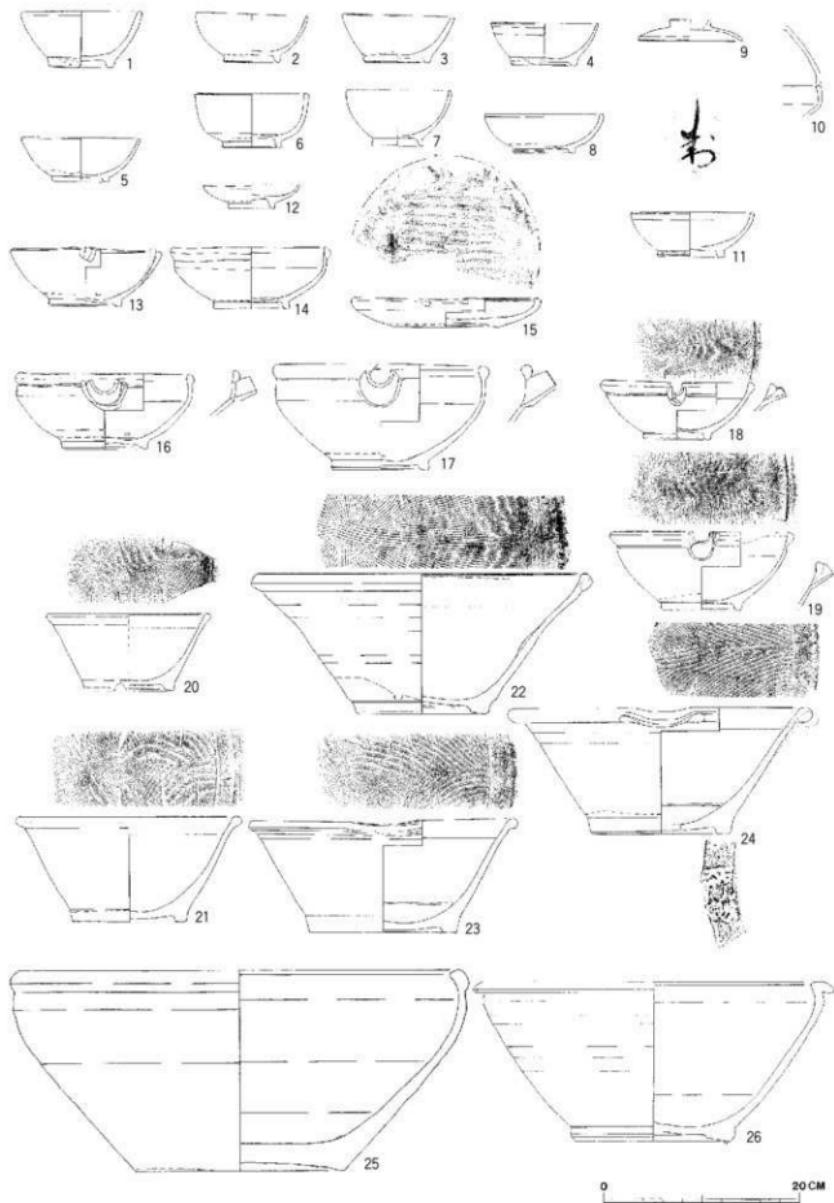
42は並釉がかかる急須の注口部で3箇所穴を空けた胴部に注口をつける。注口先端はコバルトで三葉状に塗られている。製品かどうかは、やや不明確である。43・44は行平鍋の蓋、45が行平鍋の身、47が行平鍋の把手になる。43は外面に薄く来待釉をかけ、飛鉢で模様をつける。46は体部上半に薄く来待釉をかけ、飛鉢で模様をつける。口縁端部は受口状に作り差込の片口がつく。全体的に薄手に作られる。47の把手は中空で薄い来待釉がかかる。45は並釉がかかり、肩部に飛鉢で模様をつける。底部は上げ底になると見えられる。

#### 乗燭類（第7図・48～50）

いずれも並釉がかかる。48・50は受け皿で高台をつけるもの(48)と、柱状の脚がつくもの(50)がある。49は受け皿の上に乗せる油皿である。

#### 壺櫛類（第7図・51～57）

51～53・57は来待釉、54～56は並釉がかかる。櫛の口縁は外方へ屈折する。51の櫛は内面見込に切



第6図 出土遺物(1)製品 ( $S=1/5$ )



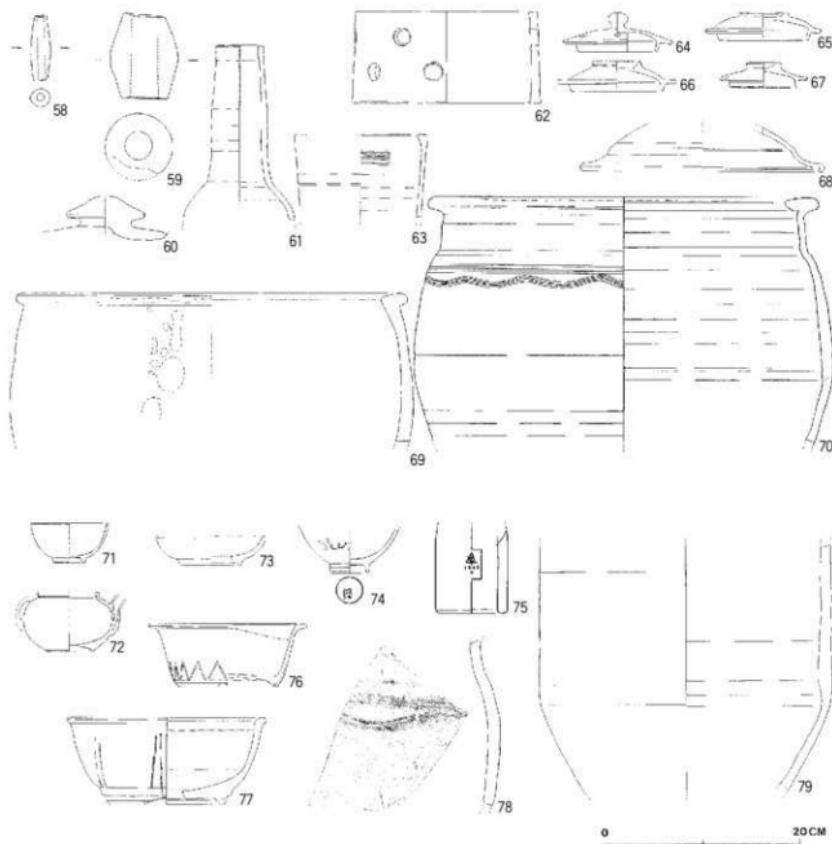
第7図 出土遺物(2) 製品 ( $S = 1/5$ )

込 6箇所のハリが溶着している。54は小型の壺で外面にコバルトの文様が描かれる。口縁端部上面と内面は釉を削り落とす。55は内面に薄く褐色釉がかかる。56は低い高台を削り出す。57は高台内面に薄く来待釉がかかり、高台接地面の釉を削り落としている。56・57は内面見込みにハリ跡が残る。

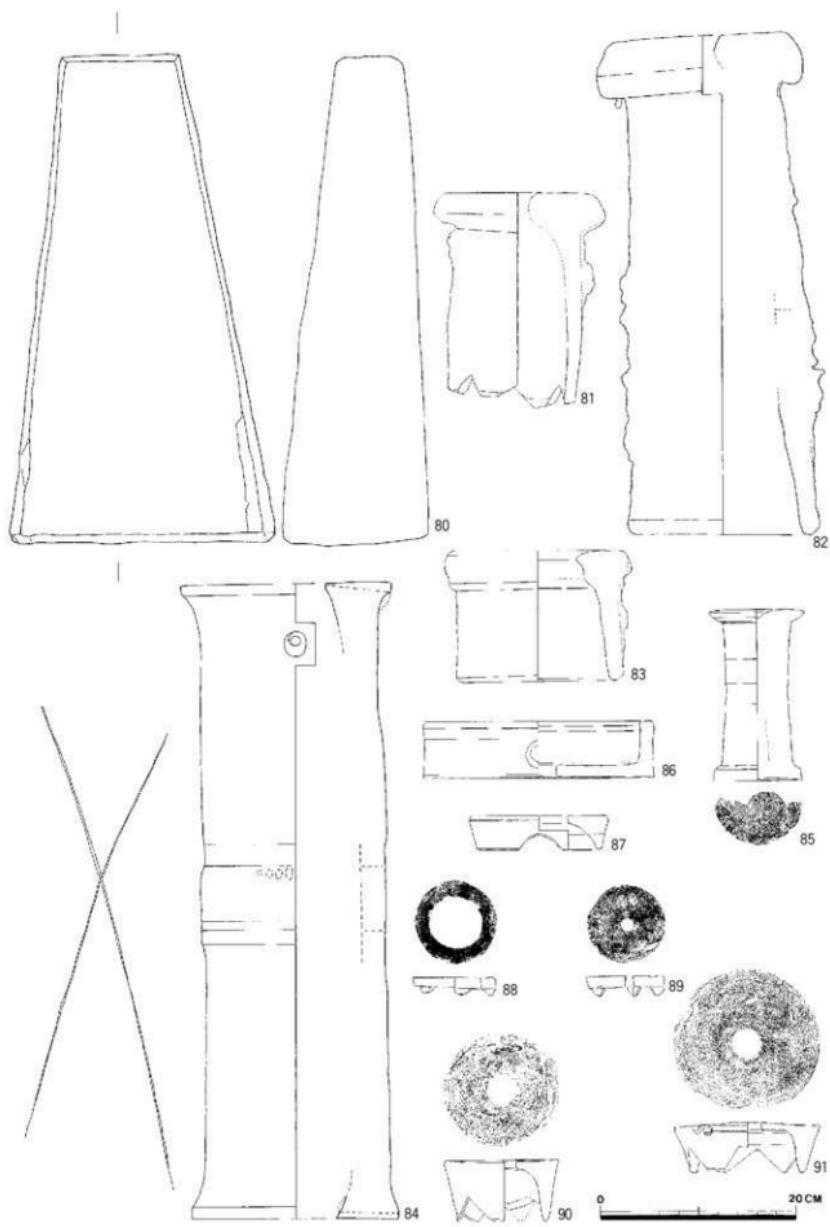
#### その他の製品(第8図・58~70)

58・59は土錘である。58は小型で素焼き(重量

0.02 kg)、59は来待釉がかかる大型のもの(重量 0.34 kg)である。60は火消し壺の蓋のつまみで素焼きである。61は花台の上部で来待釉がかかる。62は明かり取りと想定される。素焼きで筒状の胴体に穴が2段で互い違いに空く。63は花瓶の可能性がある。並釉がかかる。口縁部端部は内傾し、上端は面が作られる。体部の内側に沈線が4本入り、花の固定用と考えられる。64~67は蓋である。64・67は来待釉で、66は黄色味のつよい透明釉がかかる。65は釉が薄く、焼



第8図 出土遺物(3) 製品、その他 (S=1/5)



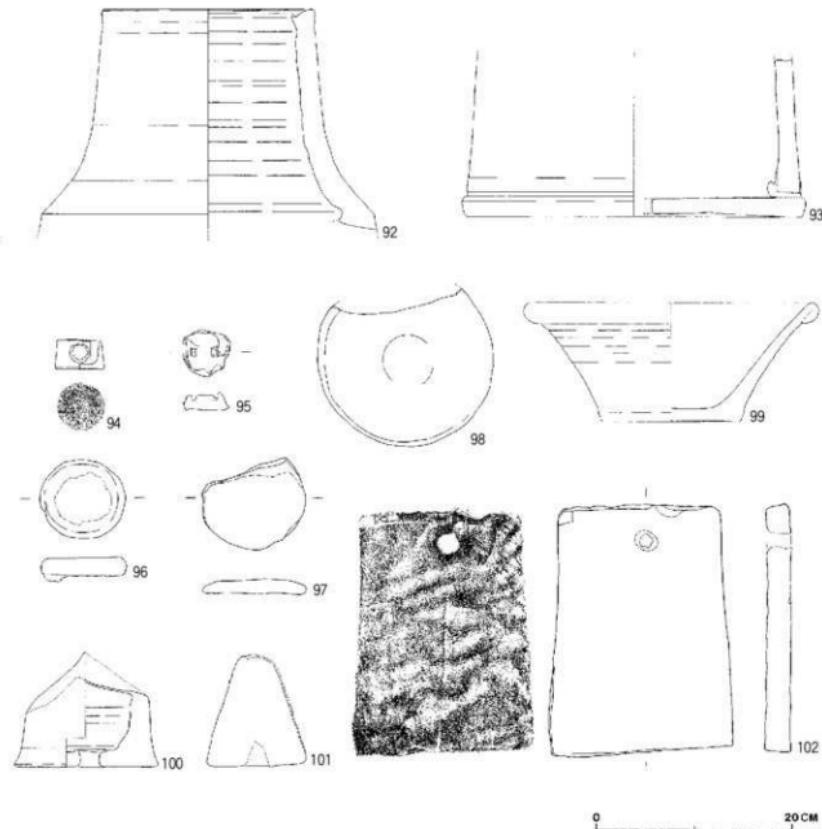
第9図 出土遺物(4)焼台類 (S=1/5)

きがあまいため灰色になる。つまみは 64 が乳頭状、65・66 は輪状、67 はボタン状のものがつく。64 は上面にハリ痕（5箇所）がある。他に 64 の下にハリがはまつて溶着したものもあり、重ね焼したことがわかる。68 はやや大型の壺の蓋で外面に並釉がかかる。口縁下端は下へ屈曲する。69・70 は甕だがここでの製品かは断定しきれない。69 は来待釉がかかるが、外面はうすく、内面はあつい。口縁端部は短く屈折し、口縁端部上面は平坦になる。70 は黒っぽい来待釉が

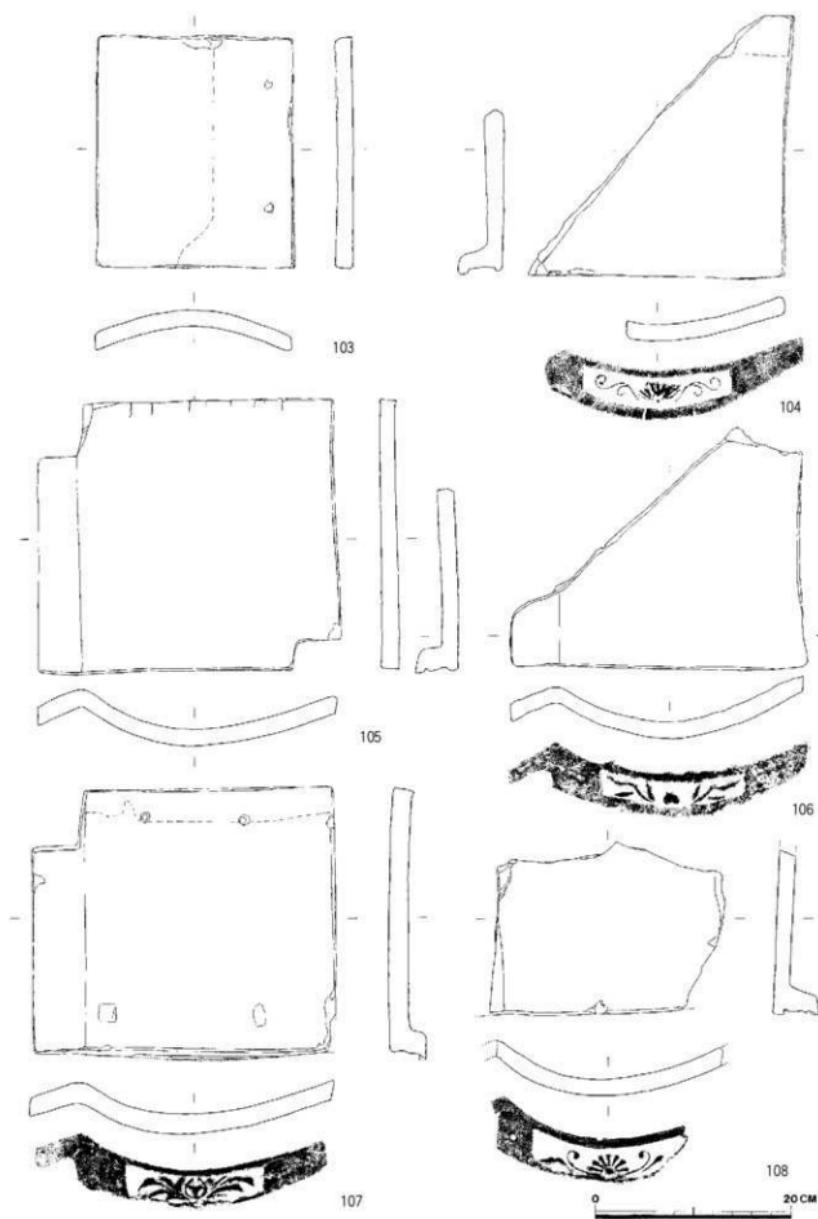
かかり、外面に溶着痕が見られる。口縁は内側へ折り曲げて内側へ張り出す上面が平坦な口縁をつくる。口縁端部上面は釉を拭き取っている。肩部に直線 5 本、波状 5 本の沈線が施される。

#### その他（第 8 図・71～79）

71・72 は薄手の褐色無釉陶器で、硬質である。71 は小壺、72 は小型の急須である。73～75 は磁器である。73 はごく浅い皿である。74 は戦時中の統制食器



第 10 図 出土遺物(5) 焼台、その他窯道具類 (S = 1/5)



第11図 出土遺物(6)瓦類 (S=1/5)

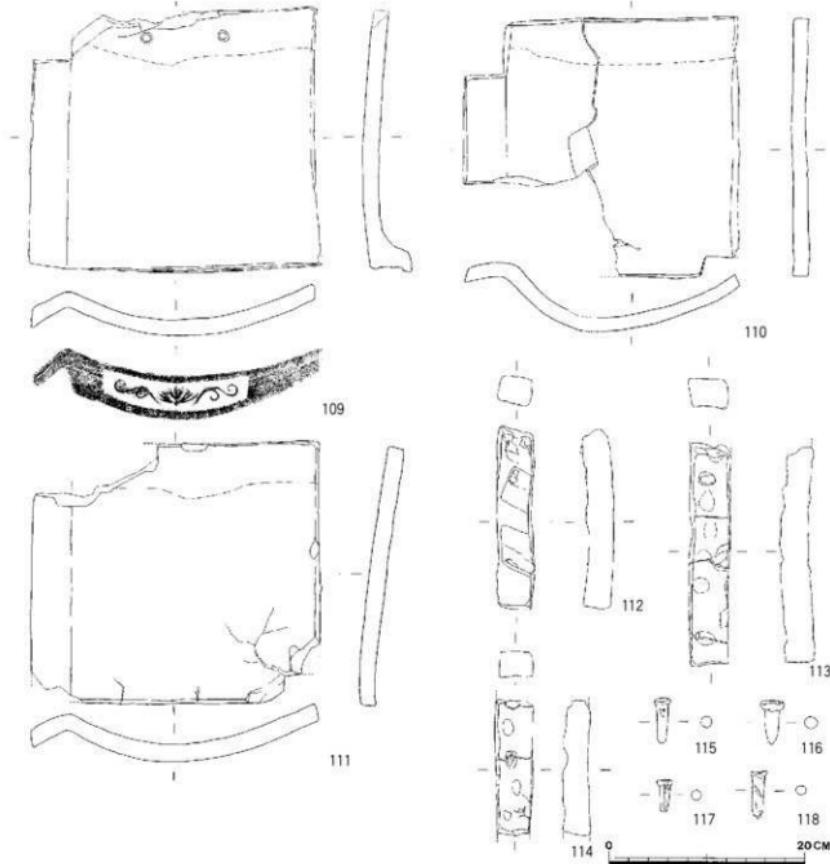
で高台内面見込みに「岐 54」と記されている。外面はコバルトと銅で模様を描く。75は筒状で器種は不明だが、外面に青色で記号と「1949 4」と描かれている。1949年4月の何らかの記念品とも想定される。

76・77は植木鉢だが、製品ではない可能性がある。76は屈折する口縁部をつくり、体部下半に鋸歯上の彫り込み文様がある。外面は淡緑色、鋸歯部は銅色になる。胎土は白色で磁器質に近い。底部に浅く「万光」「6」のスタンプがある。77は酸化クロムの上に乳白

色釉をかけている。外面に細く粗い連弁が間隔を置いて並ぶ。78はやや明るい来待釉のかかる甕破片で肩部に沈線5本、波線が5本施される。79は硫酸瓶の下半分で内外面にやや明るい来待釉がかかる。

#### 焼台類(第9・10図・80~102)

焼台類の名称を本報告で記述する上で簡単に整理する。実際に窯場で用いられた言葉ではなく、便宜上の分類名である。「火立て」(80)は房内の焚庭側に立て



第12図 出土遺物 (?) 瓦窯内製品、窯道具 (S=1/5)

て火力を調整するものである。「ヌケ」(81 ~ 84)は窯詰の際に用いる円柱状の焼台で、様々な大きさのものがある。房内の砂を敷いた床に埋めて立て、台上に焼物を置く。

「ハリ」(87 ~ 91)は焼物を重ね焼きする際に、溶着を防ぐためにはさむ焼台である。一部半円形に切込みをいれるもの(87)、粘土塊を貼付けて短い脚を作るもの(88・89)がある。切込みを数箇所入れて接地面を少なくしたもの(90・91)がある。「サヤ」(86・92・93)は中に焼物を入れる円形の箱である。

80は火立てである。1房・3房内で横倒しの状態で残っており、焼成時には立てて使用したと考えられる。全面が黒色で溶着する。81はヌケで下端に6回切込を入れる。全面釉着し、下半分は砂面に埋められていたため砂が付着する。82は器高が高く、同様に全面釉着する。83は器高が低く、同様に全面釉着する。84は大型のヌケで高さは60~75cm程度、焼物をおく上面は22cm程度である。84は、釉がついておらず、ほとんど使用されていない。ヌケは釉が全面に厚く付着するものが多い。85は円柱状の焼台で上面には砂が付着する。86はサヤで底部と側面に穴があく。底部に砂が付着する。

87~91はハリである。87は脚に円形の切込みが1箇所入るもので、指記号が1箇所つく。88・89は粘土塊を貼り付けて脚にしたものである。88は輪状、89は円盤に穿孔したものである。90・91は底部を5~7回ほど三角に切り込んで脚を作る。円形に切り込んだものもある。92・93は大型のサヤである。92は底部がないため断定できないが、天地逆になりヌケの可能性も残る。93は誰なつくりで底部と筒部を釉薬と粘土を混ぜたもので接着している。94は色見で並釉がかかる。円い穴が開けられている。95は焼成温度を測定するためのゼーゲルコーンを2本立てるための粘土の台である。96・97は円形の粘土板で、96は釉や砂が溶着することから焼台と考えられる。97は片面にだけ来待釉がかかり、釉の発色を見る試し焼用の粘土板であろう。98は薄い円盤状の焼台である。99は陶土を乾燥させるための素焼きの盛鉢である。100・101は登窯の火の見穴を外から塞ぐ栓である。

100は6房、101は1房の火の見穴からみつかった。100はヌケを打ち欠いて先を尖らせたもの、101は円錐状のものである。102は登窯の部屋の入口を塞ぐための素焼き板でトガワラと呼ばれる。片面をユビナデで粗く調整したのみである。

#### 瓦(第11、12図・103~108)

103は斐斗瓦で凸面の半分に来待釉がかかり、反対側に2箇所穿孔される。物原の最下(第4図・8層下位)で出土した。104は軒隅瓦で物原の瓦層(4図・3層)から出土した。施釉後に打ち欠いて三角形状に造る。文様は中心飾りに三本単位の松葉を3つ並べ、唐草が上下2本左右に巻く。105はいぶし瓦で全体は暗灰色になる。物原の表面から見つかり、窯の覆屋根に葺かれていたと考えられる。106は軒隅瓦で物原の表土から出土した。逆ハート状の中心飾りから唐草が伸びる。

釉が厚く溶着し、緑灰色・白色物が付着する。瓦窯の製品と考えられる。107はY字に丸の中心飾りから唐草が広がるもので、やや明るい来待釉がかかる。物原の表面から見つかり、窯の覆屋根に葺かれていたと考えられる。108はいぶし瓦の軒瓦で6房の作業場に再利用されていた。中心飾りは菊で唐草が1本巻き、1本延びる。瓦当正面左側に5mmの穴があく。

#### 瓦窯出土遺物(第12図109~111)

109は瓦窯1房の焚庭で出土した。中心飾りは104と同様で、三本単位の松葉を3つ並べ、唐草が2本巻く。110・111も瓦窯1房の焚庭で見つかった棟瓦で来待釉がかかるが、全体が被熱して焼け歪んでいる。

#### 瓦窯の窯道具(第12図112~118)

112~114はモミツチで112は全面に砂が付き、113・114は全面にモミが付いた痕跡がある。瓦を置いた痕跡、ハセの痕跡が見られる。115~118はハセで、ねじ状につくっている。瓦の間に挟むものである。

#### 第4章 総括

室田窯跡は明治時代末～戦後頃まで操業した窯で瓦窯を丸物窯へ改築していた。

石見焼窯跡の典型的なもので、ヌケやハリを焼台として用い、様々な器種の陶器を焼いていた。

窯には耐火レンガを用いてあらず、焼台や房内の壁に厚く釉が付着する。瓦窯から丸物窯への改築時期は不明確だが、丸物窯で秉燭類（第7図・48～50）を焼いており、電気が普及する前、およそ大正時代頃には丸物窯へ改築されたのである。瓦窯の大口はかつて隣接して建っていた作業小屋の1階の高さに近く、瓦窯の大口の上を造成して道を作り、丸物窯大口を瓦窯1房の壁と基礎を利用して造っている。そのときには作業場の2階からも出入りしたようである。

窯は戦中には企業統制などで休止するが、戦後しばらく操業したようである。文献からおよそ昭和28年～42年以前に終わったと考えられる。戦中には休止の証明として、窯を壊さなければならなかったようである。その際、再開することを見越してあまり支障のない場所を壊すこともあるという。丸物窯の7房の焚庭はレンガが並べられているため幅が狭い。大口からの6房までの部屋のつくりからみると不自然である。戦後は7房から上は使わず、6房まで操業した可能性もある。

遺物の器種ごとの比率は具体的には集計できなかつたが、物原からはすり鉢・植木鉢・片口鉢が多くみられ、主な生産品である。特に植木鉢は（第7図・27～29）のような典型的なものと印を入れる（第7図・31、32）など室田窯独特のものが見られ、特徴的な製品であろう。出土品には「室田」印の植木鉢、「石見焼 介製」印のすり鉢がみられる。その他に楕皿類・捏鉢・灯明皿・小型碗も一定量つくられ、大型楕（はんど）はつくられていない。

遺物のおよその変遷がわかるものは楕・皿類、すり鉢、焼台（ハリ類）である。

（第6図・1～4）の楕は来待釉のかかる1・2と綠味が強い並釉のかかる3・4がある。器形は底径にたいして器高が低く、杯の形に近い。器壁も厚く、磁

器とくらべ重い印象がある。これに対して（第6図・5・7・8・11）の楕は体部が丸みをもち、作りも薄手で磁器楕の形に近い。釉も5・8が黒い鉄釉、7がコバルト、11が黄色味の強い並釉である。楕皿類は磁器やプラスチックと競合しやすい器種で、薄手で軽量な方向へ改良が進むと考えられる。

すり鉢は内面のすり目上端の調整法から、すり目上端を軽くナデを施してすり目を薄く消すもの（第6図・18、19）、すり目上端に強くナデを施すもの（20・21・23）、すり目上端にナデを施し、さらに沈線を入れて区画するもの（24）と、より丁寧な仕上げに変遷すると考えられる。昭和9～45年に操業した平野窯跡では前者（すり目上端を軽くナデを施してすり目を薄く消すもの）はみられず、すり目上端にナデを施し、さらに沈線を入れて区画するものが多い。これはすり鉢が石見焼の代表器種として生産される中で規格化が進んだものと考えられる。

焼台（ハリ類）は粘土塊を貼付けて短い脚を作るもの（88・89）、切込を数箇所入れて接地面を少なくしたもの（90・91）、半円形に切込みをいれるもの（87）がある。前述の平野窯跡のハリ類は切込を数箇所入れるもの1点、半円の切り込みをいれるもの少量、大半が切り込みのないものである。粘土塊を貼付けて短い脚を作るもの、切込を数箇所入れるものは古い様相を示している。

周辺での石見焼窯跡の調査は内田町の平野窯跡（昭和9年～45年）で行われている。室田窯跡は一部操業時期が重なるが基本的に古い様相が伺える。昭和35年頃からのプラスチックの普及により石見焼の生産量は激減し、平野窯は規格品（すり鉢・土管・タイル・ふたつぼ）に絞って生産している。これに対し、室田窯は多種多様な器種を焼いており、石見焼が生活品として需要があった時代の様相を示している。

瓦窯から丸物窯へ改築された窯の調査例は今回が初めてである。同一経営者で瓦生産から丸物生産へ転換するきっかけは、聞き取りや当時の地域情勢などを考慮して、今後検討する必要があろう。

近年、各地で石見焼窯跡の調査が行われる一方で、基本的な跡の位置確認や詳細の聞き取り、実物によ

る製品の流通解明が今後の課題になる。今後とも基礎資料を蓄積し、現代につながる各地域の石見焼生産の実態を捉えていく必要がある。

#### 本文参考文献等

- \* 浜田西部の石見焼については、森脇 朗氏（森脇・平成3年頃まで授業）に多くのご教示をいただきました。また調査中には地元の方からも当時の様子について多くの教示を得た。
- 江津市教育委員会 2003『矢源田窯跡』  
島根県教育委員会 1997「1.12要害山城跡」  
島根県中近世城館分布調査報告書（第1集）石見の城館跡  
浜田市 1953『浜田の窯業』浜田市商工水産課  
浜田市教育委員会 2005『浜田市立原井小学校校舎建物調査報告書』  
浜田市教育委員会 2005『平野窯跡』  
東森晋 2004「道休畠遺跡の竪穴住居跡」八雲立つ風土記の丘 №178 島根県立八雲立つ風土記の丘  
平田正典 1979『石見粗陶器史考』石見地方史研究会
- 石見焼窯跡関連参考文献
- 熱田貴保 1993「石見地方における近世の窯業生産」『八雲立つ風土記の丘№122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘  
柿木村教育委員会 1982『唐人焼窯跡発掘調査概報』  
河出書房新社 1997『日本海と石州の赤い瓦』図説 島根県の歴史  
川本町教育委員会 1987『谷戸經塚・木谷石塔発掘調査報告書』  
久保智康 1994「近世赤瓦の技術系譜—『石州瓦』の位置づけをめぐって—」『八雲立つ風土記の丘№124』島根県立八雲立つ風土記の丘  
久保智康 2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海域歴史大系 第四巻 近世篇Ⅰ』清文堂  
江津市教育委員会 1991『田室窯跡発掘調査報告書』  
江津市教育委員会 1992『平成3年度埋蔵文化財調査報告書』  
江津市文化財研究会 1986『石見渦 第十・十一号』江津市の窯と窯跡  
江津市文化財研究会 1988『石見渦 第十三号 石見焼（丸物と瓦）』  
江津市誌編纂委員会 1982「第7章 商工業の発展と農林漁業の推移 第1節 商工業の展開と発展 一石見陶器と石州瓦」『江津市誌 下巻』  
島根県教育委員会 1989『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』  
島根県教育委員会 1992『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会 2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』  
島根県教育委員会 2001『石見焼関連遺跡調査報告1(飯田A遺跡・長東坊師窯跡)』  
島根県教育委員会 2001『石見焼関連遺跡調査報告2 上府八反原窯跡(佐々木窯跡)』  
島根県教育委員会 2002『石見焼関連遺跡調査報告3 大田屋窯跡』  
庄田知充 2005『近世日本海沿岸地域における摺鉢の流通』『日本海域歴史大系 第四巻 近世篇Ⅰ』清文堂  
鶴田真秀 1972『石州瓦史』  
浜田市 1973『浜田市誌 下巻』  
東森晋 1999「石見焼窯跡の発掘調査」平成11年度島根県埋蔵文化財調査センター講演会資料  
原裕司 1993『生湯窯跡』『八雲立つ風土記の丘№122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘  
平田正典 1996『菜窯四代記 抄』  
益田市教育委員会 1996『益田挺点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
松田忠幸 1997.4.23 ~ 9.3 「角の浦今昔 - 江津の歴史と文化-」9 ~ 25 山陰中央新報  
三沢治雄 1998「動木窯の物語を探る」史跡探訪会  
宮本徳昭 1993『江津市の石見焼』『八雲立つ風土記の丘№122・123』島根県立八雲立つ風土記の丘



調査前



調査後



窯跡全景



大口



1・2・3房入口



1房内部



3房焼台



6房天井



6 房断面



7 房



煙突跡



窯西側の盛土と柱跡



物原調査前



物原断面



3 房断面（旧瓦窯火溝）



2・3 房断面



旧瓦窯の大口と1房



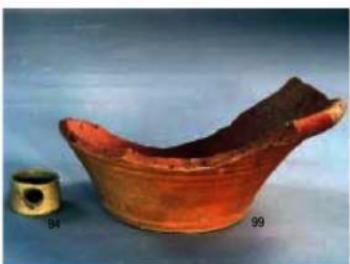
瓦窯断面















## 報告書抄録

ふりがな	むろたかまあと						
書名	室田窯跡(明治～戦後頃の石見焼窯跡)						
副書名	市道浜田西49号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	柳原 博英						
編集機関	島根県浜田市教育委員会						
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 0855-22-2612㈹						
発行年月日	2006年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○○	東経 ○○○	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
むろたかまあと 室田窯跡	しまねけん はまだし 島根県 浜田市 あつたちょう 熱田町	32202	L179		20040913 ～ 20041029	140m <sup>2</sup>	市道改良 工事によ る本発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
室田窯跡	生産遺跡 窯跡	明治～ 戦後	石見焼の連房式登窯 (丸物窯と瓦窯)	楕皿・片口鉢・すり鉢・捏鉢・植木鉢・鍋・瓶・壺・焼台類など瓦	瓦窯を改修して丸物窯へ造り替えている。		
要約	<p>江戸時代終わり頃から、石見地域では「石見焼」と呼ばれる粗陶器と瓦が焼かれ、現在も伝統産業として受け継がれている。</p> <p>室田窯跡は明治時代末頃～戦後頃までの石見焼窯跡で、当初は瓦を焼いていたが、窯を大規模に改修して丸物窯に造り替えていた。石見焼が日常生活用品として多種多様な製品の需要が高かった頃の様相を知る上で重要である。</p>						

### 室田窯跡(明治～戦後頃の石見焼窯跡)

市道浜田西49号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 浜田市教育委員会 2006年3月  
島根県浜田市殿町1番地

印刷有限公司 原 印刷